

## 私が国民学校一、二年生のときおこなってきたこと

立石 憲利

私は一九三八年三月に、岡山県久米郡大井西村中北上（現津山市中北上、合併前は久米町）に生まれた。従って敗戦時は小学校（当時は国民学校といった）二年生のときである。

県北の農村であるから、当然のこととして暮らしては苦しかったが、空襲などはなく、岡山空襲や広島原爆のことさえ知らずにいた。

私は男五人兄弟の三男だったが、年齢の関係で父も兄弟も徴兵されることはなかった。しかし親戚では、多くが戦死している。

私自身、子どもだったので十五年戦争に直接かかわることはなかったのだと、ずっと思っていた。しかし、小学校一、二年生のころ体験したことが戦争遂行のための国策の一環であったと、最近になって知ったのである。あまりにも遅すぎる自覚だが、少し報告して、戦争が決して兵士や大人だけのものではなく、小さな子どもまでも動員され、まさに総動員体制だったのだということを知っていただきたい。

小さな子どもころなので記憶に不正確なところがあり、その点は承知の上で読んでいただ

きたい。戦争遂行にかかわっていたと思われる主なものは次のとおりである。

- ①ワラビ採り。学校からのワラビ採り遠足。
  - ②ヒュージ（カラムシ）の皮を採取し、乾燥して学校に持って行く。
  - ③チガヤの採取。乾燥して供出。
  - ④カボチャの葉柄の採取。乾燥して学校へ持って行く。
  - ⑤サツマイモの葉柄、つるの供出。家で行ったを手伝う。
  - ⑥スキの穂の採取。学校に持って行く。
  - ⑦桑の皮むき。学校から刈り桑の皮をむきに行った。
  - ⑧ヒガンバナの球根掘り。手伝った。
  - ⑨ウサギの飼育。毛皮を供出したという。
  - ⑩ヒマの栽培。種を学校に持って行く。
  - ⑪松根の採掘。松の幹から生松脂の採取。兄などが行なったのについて行く。
- 以上列挙したなかから、いくつかについて少し詳しく検討してみたい。

### 一 ヒュージの皮の採取

ヒュージはカラムシ（イラクサ科）の地方名であり、『牧野日本植物図鑑』によると「茎には強い繊維があり織物をつくる」とあり、「畑にも栽培されている」とあるので繊維を採取するための作物でもあった。

田畑の畦や山裾などに自生していて、高さ二メートルぐらいになり、茎は親指ほどの太さになる。葉はウサギや牛など家畜が好んで食べる。夏になると、父や兄が牛の草を刈りに行く。

朝刈りに行くので朝草というが、大きな束にして担いで帰ってくる。それを牛に餌として与えるのだが、その前に草の中からヒュージだけを選び分けて皮をむき、カド（外庭）で天日乾燥する。夏休みの作業だった。乾燥した皮は二期に学校に持って行った。

私の手元に昭和十九年（一九四四）に発行された政府情報局編輯の『週報』が何冊かある。そのうちの一冊、八月十六日号（四〇八号）はA五判三二ページの小冊子である。『週報』は農村でも結構購読されていたといい、表紙には「隣組、職場で必ず回覧を」とある。

同号では「戦う物資」という連載特集で「繊維」を取り上げている。連載「戦う物資」のリード文には次のような書かれている。

「秋の味覚をそそる葡萄が食べられないと思ったら、葡萄からとれる酒石酸が電波兵器製造

の重要な原料として戦っていることが分った。バター製造の副産物とみられていた牛乳カゼインが木製飛行機を造るに必要な接着剤になっていることを知ったら、牛乳も飲めないと愚痴ることが出来ないばかりか、乳牛を飼うにも張合いが出る。(中略)

われわれは嘗て平和の空気を満喫していた物資が、いま決戦の武器となって祖国の危急に馳せ参じていることをはつきりと掴み、そしてこの『戦う物資』の増産に、全幅の努力を払わねばならないのである。」

このような論法で、戦争遂行のための軍需品と食糧の増産を国民に担わせていったのだ。

繊維の特集では、野生苧麻と繭が取り上げられている。

野生苧麻の項には「閣議決定に基づいて農商省から各府県宛に生産割当をしたものは、次の二十二種」である。桑皮、野生苧麻(ちよま)、ホップ、杞柳(きりゆう)皮、蘭草(いぐさ)、藤皮、葛(くず)、カナムグラ、スガモ、棉蓼、マダケ、淡竹(はちく)、錦竹(きんちく)、女竹、シナ皮、へら皮、蒲(がま)、蒲穂、七島蘭(しちとい)、青桐、芭蕉、竹皮(ヒマと笹類は研究中)。これらが繊維原料として集められたのだ。

その中で、特集の「野生苧麻」については「製織がやさしく、どんな用途にも向きますから、申し分のない繊維だといえます。従って野生苧

麻については採集が唯一の問題となって来るのです」と記している。

採集する野生苧麻は、マオ、アカソ、イラクサとなっており、いずれもイラクサ科の植物である。ヒュージは、文中ではマオの中にも含まれている。

これら植物の説明のあと、採集について「労務不足の今日、贅沢なことばかりいってもおられませんので、実際問題としては他の仕事に向かないような弱小労力、或いは他の仕事の遣り繰りによって生れる労力等を活用することとし、国民学校の児童、中等学生、婦人会、青年団等のほか農村その他から出せる労力をも加えて、広汎全国的採集運動を進めています」とある。記事は農商省繊維局によるものだ。

戦争が激しくなるに従って外国から綿などの輸入は困難になり、国産も食糧増産によって減少、その不足を補うため、あらゆる野生繊維に目が向けられていることが分かる。閣議決定、府県割当てとなり、実働部隊の最初に掲げられたのが国民学校の児童である。岡山県にどんな繊維がどれだけ割当てられ、その成果はどうだったかは不明だが、私が小学校のころの草の中からヒュージを選び分け、皮をむいて乾燥したのは、この方針にもとづいたものであることは確かであろう。

桑の皮むきに小学校から行ったのも同じである。戦争が激しくなると食糧増産の至上命令で、

養蚕農家の桑畑(刈り桑用。毎年木を刈り取る)はサツマイモ畑などに転換させられた。

私は一年生のとき、隣の集落の農家の桑畑に行き、刈り取られた二メートルばかりの桑の木皮をむいた。二人で引つ張り合いをして皮をむく。この桑畑は、そのあと株が掘り起こされて麦畑・サツマイモ畑になったことを覚えていた。

## 二、ススキの穂の採取

小学校一年生の秋、上級生と山へススキの穂を取りに行った。現在のように木が繁ったり、杉桧が植林された山になったのは、昭和三〇年代以降である。耕耘機などの普及で、農家で牛を飼育しなくなり、山で草刈りをしなくてもよいようになってからのことである。

草刈り山には、ススキがあちこちに生えており、とくに山裾には大きなススキがあった。それを草刈り鎌で引き寄せ、穂だけを切り取るのだ。百姓の子どもでも、まだ小さいので鎌の使い方には十分慣れておらず、危なかしい手つきだったと思う。

切り取ったススキの穂は束ねて、上級生が学校に持って行ったように記憶している。

子ども心に、「ススキの穂は何にするんだろう」とたずねると、上級生は「ふとんの綿にでもするんじゃないか」と教えてくれた。ふとんの綿にすると、ふわふわしたふとんができる

だろうと思つたものだ。

前掲の『週報』昭和十九年十一月十五日号(四二二号)に「戦う物資」の連載で、「薄(すすき)の穂」がある(農商省)。そこには次のように記してある。

「お月見に薄がなかつたら淋しいものですが、この薄の穂、あの純白な綿のような穂が、重要な戦う物資になつたのです」という書き出し。そして訓練に訓練を重ねた荒鷲(航空兵)が敵艦や敵機と刺し違えもせず、不時着などで戦死するようないことがあつては残念だ。そのため軽くて浮力のある浮胴衣(救命胴衣)でなければならぬ。「今までは南方に出来るカポック(パンヤ)が使われていたのですが、カポックだけでは数量が十分でないのです」(南方の島が奪還され、運搬するための船も攻撃されて運搬できなくなったということ)研究の結果、「薄の穂に白羽の矢が立った」のだという。

「陸軍被服本廠ではいくらたくさん採つても困らないばかりか、いくらでも送つていただきたいといつて居るのです。桑皮や野生苧麻を採集したような組織で、国民学校の児童はもちろんのこと、農家も非農家も総動員をして島や山の帰りには薄の穂を持って来ていただく」ようにしてほしい。

「ここでも国民学校の児童がトップに掲げられている。そして「国民学校の先生方はいろいろの事業(物資集めなどの事業。授業ではない」

筆者注)で忙しいでしょうが、学童を急速に動員して採集に努力して下さい」と。

そして、「この仕事は疎開児童にも適当しているでしょう。都会で育つた児童に、秋晴れの下で薄の穂を切り取らせることは、児童にとつて変つた興味が起こるはずだ」とまで言っている。親元から離れ、見知らぬ所で、腹を空かせて慣れない集団生活をしている疎開児童に「変つた興味が起こるはず」と、よくもぬけぬけと言えたものだと思う。しかし、飛行機もろとも敵の軍艦や飛行機に体当たりするというやり方で、兵士の命をなんとも思わないのだから、疎開児童にまで気配りなどできるはずがないといえればそれまでだ。

私がスキの穂を取りに行ったのも、この方針にもとづいたものであろう。そして先生から言われた通りに上級生と採りに行つていたので。

### 三. カボチャの葉柄採取

夏休みにカボチャの葉柄を切り取り、天日で乾かして学校に持つて行つた。カボチャそのものならいざ知らず、葉柄を何にしたのだろうとずつと疑問に思つていた。

『週報』昭和十九年三月八日号(三八五号)に「戦時食糧の増産」の特集があり、「かぼちゃを作るう」「じゃがいもの大増産へ」の二本の記事がある(いずれも農商省)。

その記事にはカボチャの利点があげられ、①

どこにでも適する。②種がらくに手に入る。③荒地、空地等の利用によい。④用途が広く便利。⑤防空の迷彩にもなるとして、「かぼちゃをうんと作つて、絶対戦時下の食糧増産に役立てたい」としている。

用途の項を見ると、「塩茹や雑炊として主食に、切干や冷凍野菜に、「さらにアルコールの原料や家畜の餌にもなり、なお葉柄は露と同じように食べられ、種は油が多いので炒つて菓子やごまの代用に」とある(傍線は筆者)。

カボチャの葉柄を採つたのは、フキと同じように食べるためだったのだと、長年の疑問が解けた。乾燥した葉柄は、水にもどして汁の具にしたり、煮付けや佃煮のようにでもして食べたのだろうか。

### 四. ワラビ採り、サツマイモのつるの採取

四月、国民学校(小学校)に入學した年も二年生のときも春の遠足はワラビ採りであった。当時は前述のように山は草刈り山が多かつたため、どこにでもワラビは生えていた。それでも、よいワラビが生え、多人数でも採れ、遠足だから一定の距離があるところなどが考慮されたのだろう、学校から一時間ほど離れた加治子山に行つたように記憶している。たくさんワラビを採り、それは学校に集められた。

サツマイモは食糧増産の方針によって、わが家でも入会地などを開墾してイモ畑にした。二か所で五く六畝（五く六アール）ほどだったろうか。開墾の手伝い（邪魔）をしに行つた記憶がある。戦後も当分の間、その畑でサツマイモを作っていた。

サツマイモは食料の不足を補うもので、供出もし、子どものおやつの主なものだった。サツマイモのつるを運ぶのも手伝いをした。

『岡山県政史 昭和前期編』の史料をみると、「昭和十九年度軍需並非常時用品採取加工供出運動実施要領」（昭和十九年四月十五日付）に、「四月二十日から七月末まで農業会・森林組合・大政翼賛会・青少年団・国民学校・青年学校・婦人会を参加団体として」次の山菜を採取するとして数字が掲げられている。

干わらび 一万貫（生で十萬貫）  
千ぜんまい 五百貫（生で五千貫）  
干山ふき 五千貫（生で七萬貫）

干わらび一万貫というのは、三七・五トンであり、生だと三七五トンという大変な数量だ。その他も同じだ。

採取団体には、ちゃんと国民学校も組み込まれていて、遠足のワラビ採りは、この要領にもとづいたものであろう。

「戦時未利用食採取運動実施要領」（昭和十九年八月二十二日付）には、「九月一日から二十年

三月末までを期間とし、大政翼賛会・農業会・森林組合・青少年団・国民学校・青年学校・農産食糧協会・食糧営団を参加団体として、次の量を目標とする」とあり、列記されている。

干ヨモギ 三萬貫（生で二〇萬貫）  
干甘藷葉柄 二萬貫（生で二〇萬貫）  
干甘藷蔓 二〇萬貫（生で二五〇萬貫）  
千里芋茎 二萬五千貫（生で四一萬貫）  
干大根葉 一萬貫（生で一〇萬貫）  
葛根 生二五萬貫

同年八月十七日付「戦時未利用食糧採取加工供出要綱」では「採取に関して県は学童、青少年団、婦人団体を組織的に動員する等の方法を講ずるものとす」とあり、国民学校の児童がトップに掲げられ、重要な役割を担わされている。学校からのワラビ採り、サツマイモのつるの採取などは、これにもとづいたものであろう。

## 五. トマトの栽培

学校でヒマの種をもらい、畑の隅などに植えた。子どもの背丈よりずっと大きくなり、種を採取して学校に持って行くのだ。

昭和二十年四月七日付「ヒマ緊急増産実施要項」を決定、昭和十七年以降実施されていたヒマの増産をさらに強化した。

要項の第一には「苛烈なる戦局の現況に鑑み、航空潤滑油原料たるヒマ子の飛躍的増産を期す

るは、刻下極めて喫緊の要務なるを以て、耕地以外は全面的に活用し、生産ヒマ子全量を陸海軍に供出し、以て戦力の充実増強に寄与せんとす」と方針を掲げている。

そして農家一戸平均四十本以上、非農家五本以上、国民学校三年以下学童一名平均二本以上（収穫目標三合以上）などと生産割当をしている。国民学校三年生以下に注目していただきたい。四年生以上は家の割当に組み込まれているのだから。

飛行機の燃料にする松根油と生松脂の採取作業について行き、潤滑油のヒマの生産は自らも行ったのだ。（注、（四）以降の県の通達文書は原文が片仮名表記）

以上、国民学校一、二年生のころの体験をわずかな記憶にもとづいて記したが、それは国の方針にもとづいて学童が動員され、その一端を担わされていたのだということがはつきりした子どもだったので戦争にかかわることはなかったという思いがくつがえされたのである。総動員体制というのは、こういうことでもあったのだ。

（注、引用文の表記は現代かな遣いに改めた）  
（たていし のりとし）

本稿は「岡山の十五年戦争を考える研究集芸」（二〇〇六年十二月三日）での報告に加筆したものである。